『新編魯般营造正式』における魯般尺法と圧白尺法に関する研究

STUDY ON LUBAN RULER AND YABAI RULER IN THE BOOK OF XINBIAN LUBAN YINGZAO ZHENGSHI

朱 寧 寧*

Ningning ZHU

Xinbian Luban Yingzao Zhengshi was written by craftsmen during the Yuan Dynasty (A.D.1271~ A.D. 1368). The present study suggested that two “divination rulers” were used to design constructions, gates and doors. One was called the “Luban Ruler”, and another was the “Yabai Ruler”. This study clarified the relationship between the two rulers and measurements of the houses, gates and doors, which were written in this book.

Keywords: *Xinbian Luban Yingzao Zhengshi, Luban Ruler, Yabai Ruler, Measurement of house building, History of Chinese Architecture, Architectural books*

新編魯般营造正式, 魯般尺法, 圧白尺法, 民家架構寸法, 中国建築史, 建築技術書

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

『新編魯般营造正式』は工匠が中国南部の建築技術について記した書籍である。現在唯一の版本は寧波の天一閣に所蔵されている。全文6巻、72ページ、4500字程度で、図版22枚を含む。

本書は中国南方の『营造法式』と呼ばれ、中国南方建築史にとって、重要な研究的価値を持つ文献である。本書の研究は1930年代に始まった。郭湖生によって、本書の成立年代は元代であり¹、明代の『魯班経』の祖本の一つであると述べた。以上の点は学会で通説とされている。また、郭は本書が、福建地方で記されたものとした。郭湖生の校勘記入²を筆者が整理し、全文解釈を行ったところ、記述の中に見られる建築部材がすべて福建地方特有の部材名が使われること、または、福建地方特有の部材である³ことから、郭の説は同意できるものである。

本書は内容的に8部⁴から構成され、その中の「魯般尺法および圧白尺法」と「門および構架尺寸」が最も主要なものであり、明代の日用の類書⁵と『魯般経』に数多く引用された。「尺法」とは尺の制度、用法、法則などを指す。中国では尺法中に卜占の意味が含まれるが、魯般尺法および圧白尺法は最も一般的に見られるもので、門と民家の架構の寸法を決定する際に用いられる。本書は魯般尺法と圧白尺法について記載される中国古籍の中で最も詳細なものの一つである。本書中の「門および構架尺寸」は尺法を説明するための具体的な寸法の例であり、尺法研究に貴重な寸法根拠を提供している。

中国建築史の中でも、民家建築史においては、尺法の研究が基礎的な課題である。魯般尺法と圧白尺法に関する既往研究の内に、代表的なものは陳輝東⁶、程建軍⁷、李哲揚⁸などにより行われてきたが、

以下の3点が問題点と考える。

1) 両種の尺法に関する既往研究は、部分的な文献史料の解説によっており、未だ総体的に文献史料を網羅した研究と結論は出されていない。

2) 本書は最も詳細な尺法に関する史料で、特に具体的な尺法と合う寸法の例も本書中の「門および構架尺寸」に書かれるが、これに関する研究はそれほど専門的、詳細には行われておらず、尺法研究分野の基礎となる本書における尺法に関する総体的な研究はまだ行われていない。

3) 地域遺構の尺法復原研究は史料の総合が不十分で、かつ見解が不統一な既往研究を根拠にしており、その復原の結果も、様々な議論をおこしている。

本論はいくつかの史料における尺法について例をあげ、総合的に比較した上で、本書の尺法について、詳細な分析研究を行い、元代の中国南部建築に見られる両種の尺法の使用法を明らかにしようとするものである。そして、中国および周辺国家に見られる両種の尺法研究と遺構の復原研究に基礎を提供しようと試みるものである。

1.2 研究内容与方法

本論の研究内容は既往研究を基礎とし、原文解説を通して「魯般尺法および圧白尺法」の尺法原理を分析する。そして、「門および構架寸法」に対する寸法検証や他の史料における尺法や先行研究のヒヤリングの結果をその尺法原理と比較する。更に、本書中の尺法内容の編纂背景、即ち、元代福建地区における尺法の伝播と変化、また魯般尺法と圧白尺法の使用が建築設計に及ぼす影響と意義の考察を試みたものである。本論の研究方法は、本書中の尺法原理を注釈し、寸法値を尺法にあてはめ分析し、他の史料に記載される尺法

* 早稲田大学創造理工学術院建築学専攻 博士後期課程・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, School of Creative Science and Engineering, Waseda University, M. Eng.

内容をまとめ、既往研究の尺法に関するヒヤリングの結果を説明することである。以上四点の結果を比較し、福建地方の尺法の変遷について考察を試みる。

2. 尺法概念について

2.1 尺法概念

尺法は中国古籍文献中に、魯般尺法、飛白尺法（即ち、圧白尺法）、玄女尺法など、様々なト占の意味を持つ尺法の記載が見られる。表1にこれらの尺法史料をまとめた。その中でも、魯般尺法と圧白尺法が最もよく見られる。

2.2 魯般尺法の概念

魯般尺（または魯班尺）の名は魯般が発明したことに由来するとされるが、その起源はよく分かっていない。これは吉凶ト占の意味を持つ尺法であり、1尺の間を八分し、「財病離義官劫害吉」の八字をあて、「財義官吉」は吉、「病離劫害」は凶とする。寸法を測る際にその長さがあたる文字により、寸法に吉凶の意味を付け加える。魯般尺法は中国南方を中心として、広い地域で使用されている。日本およびベトナムの文献史料にも魯般尺の記載が見られ、実際に使用された魯般尺が現存する⁹。

2.3 圧白尺法の概念

「圧白」は、程建軍の研究によれば、九星¹⁰には九色が当てはめられ、1から9までの数字に対応し、それぞれ「一白二黒三碧四緑五黄六白七赤八白九紫」となる。その数字と色の対応関係は『造命宗鏡集』に書かれている（図1）。その内の「白」（即ち1、6、8）は吉であり、「紫」（即ち9）は「小吉」、そのほか（即ち2、3、4、5、7）は「凶」とされる。文献資料によれば、圧白の方法はまた九星白法¹¹とも称される。「圧白尺法」とは寸法を「白」にあたる数字にあわせること、即ち、1、6、8の数字を選んで使うことである。寸の位をこれらの数字にすることを「寸白」と呼ぶ。即ち、1寸、6寸、8寸を吉とすることである。同じ原理で、「尺白」は尺を基準単位として、1尺、6尺、8尺を吉とすることであり、「分白」は分を基準単位として、1分、6分、8分を吉とすることである。「圧白尺法」は中国広東省東部、福建省南部、浙江省、江蘇省、江西省、安徽省、台湾省などで使用されている¹²。張玉瑜の調査によれば、福建の工匠は「圧白」を「合白」とも呼ぶ¹³。沖縄の「唐尺」¹⁴の裏面にも「圧白尺法」と「魯般尺法」を併せて使う方法が書かれている。

九	八	七	六	五	四	三	二	一
紫	白	赤	白	黄	緑	碧	黒	白
○	○	●	○	●	●	●	●	○

図1 『造命宗鏡集』における数字と色の対応関係

3. 尺法に関する史料のまとめ

魯般尺法と圧白尺法は地域や時代によって異なり、また多様な使用方法と規則を持つ。以下に文献史料をあげ、比較を行う。

文献史料を見比べれば、魯般尺には様々な種類があることが分かる。1尺は造営尺の8.8寸〜14.4寸に相当する（表2）。八字については、「病離」の順序が相反し（『造命宗鏡集』）、また「吉」を「本」とする魯般尺も存在する（『事林広記』、『造命宗鏡集』、『揚州畫舫録』、『三農紀』）。八字の吉凶の比率は4吉、4凶とするものの他に、「財

吉」が吉、「病離義官劫害」は凶、吉凶の比率は1:3とする史料もある（『三農紀』）。

同様に圧白法に関する文献史料をまとめると、表3になる。「圧白尺法」は寸法値と九色、および吉凶に対応するように用いられる。尺法以外、方位、時間の数も九色の吉凶に対応して、ト占として用いられる（『讀書紀數略』、『造命宗鏡集』、『揚州畫舫録』）。

4. 『新編魯般營造正式』における尺法原理

本書の具体的な内容は45項目¹⁵から構成される。「魯般尺法および圧白尺法」の内容は、第6, 7, 8, 9, 10, 11, 18, 19項目に記述され、以下に両種の尺法の使用方法について解説する。なお、その原文と注釈を注に載せた。

4.1 尺法原理の解説

上記項目の記述¹⁶より、尺法の原理は以下である。魯般尺の1尺は營造尺の1.44尺であり、1尺の間には「財病離義官劫害吉」の八字があてられ、魯般尺は門を造る時に用いられるということが分かる。曲尺の1尺は10寸に分かれ、1寸は10分に分かれる。寸法値には色が対応しており、1、6、8を白（吉）、9を紫（小吉）とし、その四つの数字が吉数となる。「本」字が「吉」又は「財」の替わりとなり、用いられることもある。架構および門の構造の高さ、長さなどの寸法に圧白尺法を用いる。門および架構における圧白尺法は魯般尺法と併せて用いる必要がある。本書の項目6、10には尺法を説明するための「曲尺之図」と「魯般真尺図」があり、これより復原図を作成した（図2、図3）。

4.2 「魯般尺詩八首」の解説

第7項目の「魯般尺詩八首」では、魯般尺の八字から八首の詩が作られており、全体で30行となる。八首詩中、八字にはそれぞれ、「吉祥」「入財」「昇官」「孝順」「分離」「病氣」「被害」「被盜」の異なる人生の意味が宛てられ、住宅平面の中の大門～廊門の8種の門に対応しており、これをまとめると、表4の18項（A～R）¹⁷となる。この八字は単純に4凶4吉に分かれているのではなく、大吉、小吉、小凶、大凶という4つの等級を持つ。大吉（「財」、「吉」）はすべての門に用いることが可能で、小吉（「義」、「官」）は吉ではあるが、門の種類によっては不適切の場合もある。小凶（「病」、「離」）は凶だが、門によっては用いてもよい場合もある。大凶（「害」、「劫」）は、いずれの場合も用いてはならないとされる。具体的に、小吉のうち「義」は、廊門（L）に用いてはならず、中門（K）では吉が凶に転ずる可能性があり、厨門（M）にのみ用いることができる。「官」は大門（N）に用いてはならず、房門（O）に用いた場合は凶となる可能性がある。小凶のうち「病」は厠門（G）に用いることができる。以上のような八字と八門の対応関係より、福建省の典型的な住宅平面における対応図（図4）を描き出すことができる。

5. 尺法原理と他の史料の尺法の比較

上記原文の解説から分かった本書の尺法原理と他の史料における尺法の比較を行うと、本書中の魯般尺が營造尺に対応する長さが一番長い（14.4寸）。一尺の内の八字の種類は3組、吉凶分類が4組あり（表2の[ ]印）、他の史料の記載より複雑である。一方で、本書中の圧白法は時間と方位に関わらず、寸法だけで使い（表3の[ ]印）、他の史料の記載より簡単な方法となっている。

表1 文献史料別「尺法」のまとめ

文献史料書名	尺法に関する記載
[宋]事林広記 ¹⁸	魯般尺法、飛白尺法
[元]居家必用事類全集 ¹⁹	開門尺法、魯般尺法
[明]宅寶經 ²⁰	九天玄女裝門尺法
[明]魯班經 ²¹	大抵尺法各隨匠人所傳術者
[清]揚州畫舫錄 ²²	古尺法為十五種
[清]陽宅十書 ²³	用門尺法
[元]新編魯般營造正式 ²⁴	凡人造門，用依尺法也

表2 文献史料別「魯般尺法」のまとめ

文献史料書名	尺名	尺長	字長	八字	吉凶
[宋]事林広記 ²⁵	魯般尺	12寸	1.5寸	財病離義官劫害吉	1:1
[元]居家必用事類全集 ²⁶	同上	同上	同上	同上	同上
[宋]事林広記 ²⁷	魯般尺	11寸	1.375寸	財病離義官劫害本	1:1
[明]造命宗鏡集 ²⁸	魯班尺			財離病義官劫害本	1:1
[清]（同治）蘇州府志 ²⁹	魯班尺	8.8寸	1.1寸		
[清]樂律表微 ³⁰	魯班尺	9寸	1.125寸		
[清]揚州畫舫錄 ³¹	八字尺 ³²	14.4寸	1.8寸	財病離義官劫害本	1:1
[清]三農紀 ³³	魯班尺			財病離義官劫害本	1:3
[元]『新編魯般營造正式』	魯般尺	14.4寸	1.8寸	財病離義官劫害吉 財病離義官劫害本 本病離義官劫害吉	1:1:1 :1注 ³⁴

表3 文献史料別「圧白法」のまとめ

文献史料書名	尺名	圧白の方法	用法
[宋]事林広記 ³⁵	飛白尺	一白二黒三碧四緑五黄六白七赤八白九紫	寸法
[明]造命宗鏡集 ³⁶	子房尺	同上	寸法
[明]魯班經 ³⁷	圧白	尺寸用圧白不可犯在黒上	寸法
[清]三農紀 ³⁸	圧白	六白	寸法
[清]揚州畫舫錄 ³⁹	曲尺	一白二黒三碧四緑五黄六白七赤八白九紫一白	寸法
[清]讀書紀數略 ⁴⁰		一白正北二黒西南三碧正東四緑東南五黄中宮六白西北七赤正西八白東北九紫正南	方位
[明]造命宗鏡集 ⁴¹		三元年白例、三元月白例、三元日白例、三元時白例、年白不如月白、日白有方力大吉、時白則不如也。	時間
[清]揚州畫舫錄 ⁴²	九天玄女尺	三白九紫、日時尺寸合白	寸法 時間
[元]新編魯般營造正式	曲尺	一白、六白、八白、九紫	寸法

図2 原文における「曲尺之図」と「魯般真尺図」

図3 原文による曲尺と魯般真尺の復原

表4 「魯般尺詩八首」における「八字凶吉」と門の対応

		関係							
吉凶		大門	外門	中門	内門	房門	厨門	厠門	廊門
大吉	吉			RO					
	財	CO	AO	BO		DO			
小吉	義			K●			MO		LO●
	官	N●				O●			
小凶	病		E●	F●					G●
	離		H●	I●		J●			
大凶	害		P●		Q●				
	劫								

凡例：○は良い。●数字は良いが、門によっては凶、禁止。●数字は悪いが、門によっては、使えるまたは悪さが減る。●は悪い、禁止。A～Rは注16を参照。

図4 平面図から見る「魯般尺詩八首」における「八字凶吉」と門の対応関係（凡例は表4と同じ）

6. 『新編魯般營造正式』における尺法検証

前節の4.1の【尺法原理の解説】によって、魯般尺法と圧白尺法が門と架構の寸法に用いられることは確認できた。しかし、本書の「門および架構寸法」(項目6, 15, 18, 22, 24)に記載される寸法に二つの尺法が実際に適用しているのかを検証する必要があると考える。そこで、本書における門と架構寸法の吉凶の割合を見ることを通じて、尺法の使用方法を分析する。

6.1 門寸法の吉比率

第6項目「魯般真尺」⁴³の中に示される八個の門の寸法は、それぞれ0.8, 21, 28, 42, 43.1, 43.8, 56, 56.6寸である(表5の①)。21, 28, 56寸の寸法は末尾がそれぞれ1寸, 8寸, 6寸である。また0.8, 43.1, 43.8, 56.6寸の末尾は8分, 1分, 8分, 6分である。これらの寸法はみな「圧白」であり、末尾が寸の単位になる場合を前述のように「寸白」と呼び、末尾が分の単位の場合は「分白」と呼ぶ。その内にただ一つの例外である、42寸の末尾である2寸は「二黒」を示すが、これは悪い例としてあげられたものである。魯般尺上の寸法には財、吉、義があてられている(その内に財、吉は7個、使用率は87.5%、最も用いる)。42寸の例外を除くと、門の寸法は圧白尺法および魯般尺法で共に吉であり、即ち、全寸法における吉の寸法の比率(本論では「吉比率」と呼ぶ)は100%である(図5のA-1、図5のA-2)。

6.2 架構寸法の吉比率

第15, 18, 22, 24の四つの項目⁴⁴で、「三架、五架、七架、九架」の4組の架構形式と、「歩柱、仲柱、棟柱、架深、心間、次間」⁴⁵の六つの寸法値の組み合わせで、20個の寸法が示されている(表5の②)。これらの寸法を圧白尺法に当てはめると、圧白になる寸法は18個、圧白にならない寸法は2個(143、43寸)となる。魯般尺法上で吉となる寸法は13個、凶となるのは7個(111、46、126、206、48、220、148寸)である。圧白尺法での吉比率は90%(図5のA-3)、魯般尺法での吉比率は65%である(図5のA-4)。各柱間の寸法値を加えると、「総架深」、「総面闊」⁴⁶の値が分かり、それらは7個の寸法値となる⁴⁷(表5の③)。このうち、圧白尺法で吉が4個、凶が3個(313、415、344寸)である。魯般尺法では吉が3個、凶が4個(168、313、378、415寸)となる。圧白尺法での吉比率は57.1%(図5のA-5)、魯般尺法上の吉比率は42.9%である(図5のA-6)。

以上の架構寸法または架構全体寸法における「圧白」とする寸法は全て「寸白」ということが確認できる。

6.3 吉比率の比較検証

6.1の【門寸法の吉比率】で示した二組の吉比率および6.2の【架構寸法の吉比率】で示した四組の吉比率と任意の数字が圧白尺法における「白」となる可能性40%⁴⁸、魯般尺法における「財義官吉」となる可能性50%⁴⁹を図5にまとめて示す。3組(図5のB-2)における吉比率(即ち架構寸法における魯般尺法、架構全体寸法における圧白尺法、架構全体寸法における魯般尺法)は、それぞれ65%、57.1%、42.9%となり、任意寸法に対する吉比率に近い、或いはそれを下回るため、これら3組では圧白尺法あるいは魯般尺法を用いていないことが推測される。そのほかの3組(図5のB-1)の吉比率(即ち、門寸法における圧白尺法と魯般尺法、架構寸法における圧白尺法)は、それぞれ100%、100%、90%となり、任意寸法に対する吉比率の2倍以上となるため、これら3組では圧白尺法あるいは魯般尺法が用いられていると推測される。

表5 尺法における門と架構寸法の凶吉のまとめ(単位:寸)

① 門寸法								
指定項目	0.8	21	28	42	43.1	43.8	56	56.6
門	八白 ○ 財 ○	一白 ○ 義 ○	八白 ○ 吉 ○	二黒 ● 吉 ○	一白 ○ 吉 ○	八白 ○ 財 ○	六白 ○ 吉 ○	六白 ○ 吉 ○
② 架構寸法							③ 架構全体寸法	
指定項目	歩柱	仲柱	棟柱	架深	心間	次間	総架深	総面闊
三架後連一架	101 一白 ○ 財 ○		121 一白 ○ 義 ○	56 六白 ○ 吉 ○	111 一白 ○ 劫 ●	101 一白 ○ 財 ○	168 八白 ○ 劫 ●	313 三緑 ○ 劫 ●
五架拖後一柱	108 八白 ○ 義官 ○	128 八白 ○ 吉 ○	151 一白 ○ 義 ○	46 六白 ○ 病 ●	136 六白 ○ 義 ○	121 一白 ○ 義 ○	230 十白 ○ 吉 ○	378 八白 ○ 病離 ●
正七架	126 六白 ○ 劫害 ●		206 六白 ○ 離 ●	48 八白 ○ 離 ●	143 三緑 ○ 吉 ○	136 六白 ○ 義 ○	288 八白 ○ 吉財 ○	415 五黄 ○ 害 ●
正九架	136 六白 ○ 義 ○		220 十白 ○ 離 ●	43 三緑 ○ 吉 ○	148 八白 ○ 離 ●		344 四碧 ○ 吉 ○	

凡例: 寸法値の下の一行目は魯般尺法における吉凶である。その下の○は吉の意味で、●は凶の意味である。次の一行目は圧白尺法における吉凶である。○と●の意味は上と同じである。以上寸法吉凶の説明は図6になる。

図5 尺法における門と架構寸法の吉比率の比較

凡例: 丸の中の白い部分には吉の寸法の数、黒い部分には凶の寸法の数。

上記より、尺法検証の結果をまとめる。

- 1) 魯般尺法は門に用い、圧白尺法は門および民家架構寸法に用いる。民家架構の全体寸法には魯般尺法も圧白尺法も用いない。
- 2) 魯般尺法は、門を造る際、「吉」「財」の2文字を最も用いる。圧白尺法は門を造る際、「寸白」と「分白」を用い、架構においては「寸白」を用いる。

7. 尺法原理と尺法検証の比較

前節6の【尺法検証】から見られる検証結果と4の【尺法原理】で見た尺法原理を比較すると、合致する点と合致しない点が出てくる(表6の①と②)。

7.1 尺法原理と尺法検証合致する点

1) 4.1の【尺法原理の解説】と6.3の【吉比率の比較検証】合致する点を以下で述べる。4.1によって、魯般尺法と圧白尺法を併せて、門に用いられる点は6.3の結果と合致する。又、4.1によって、架構の部材寸法に圧白尺法が用いられ、6.3の結果が示すように、柱間と桁間に圧白尺法が用いられる。一見異なるように見えるが、中国南方木造建築では、柱間、桁間の寸法は、梁、桁、貫など部材の長さで決まる⁵¹⁾ので、部材の寸法と同じであり、2項の結果が一致する。

2) 4.2の【「魯般尺詩八首」の解説】と6.1の【門寸法の吉比率】合致する点を以下で述べる。4.2によって、魯般尺法の八字には四吉、四凶が含まれるが、造門時に使用できるのは「吉」、「財」のみで、「官」、「義」の使用は禁忌である。6.1で示した8個の門の寸法のうち、7個は「吉」、「財」の寸法を示して、4.2の結果と合致する。ただ1個(21寸)が義字に当たて、表4に示したことから、この21寸(義)は厨門の寸法として用いることができる。

以上の比較は表6の①と②の三つの「合」で示される。

7.2 尺法原理と尺法検証合致しない点

4.1の【尺法原理の解説】と6.3の【吉比率の比較検証】合致しない点を以下で述べる。4.1では、架構における圧白尺法は魯般尺法と併せて用いる必要があるとした。一方、6.3では圧白尺法は門および民家架構に用いて、魯般尺法は架構に用いられないとした(表6の①と②の「不合」)。一致しない理由として、異なる方法が混在していることが考えられる。これ尺法の混在について原文に「今時匠人則開門、潤四尺二寸、乃為「二黒」、般尺又在「吉」上」⁵²⁾の記載もある。この文によって、当地の工匠は門を造る場合は、42寸を用いており、42寸は魯般尺法では「吉」、圧白尺法では「二黒」(凶)であることから、本書を編纂する時、当地では魯般尺法を用い、圧白尺法の方法は用いなかったと推測される。用いなかった原因は、魯般尺法は元代の福建地方の方法(表6の④)で、圧白尺法は外部から転入され、まだ普及していなかった方法(表6の③)であるからだと推測できる。その外部の伝入された圧白尺法は架構において上記に合致しない4.1と6.3から見える二つの方法であると考えられる。即ち、一つは表6の①に見られる架構寸法における圧白尺法と魯般尺法を併せて用いる使用方法であり、もう一つは表6の②に見られる架構に圧白尺法のみが使われる方法である。その圧白尺法が架構における二つの使用方法が異なる源流から福建省へ来ているか、または福建省で異なる発展過程にあったかについては、本書の編纂過程と福建省尺法の伝播関係⁵³⁾のテーマとして今後の詳細な研究が期

待される。尺法の差異以外にも本書中の「古」と違う「今」の技術が記述されている⁵⁴⁾。これらの差異があるのも伝来された技術または外来技術書の内容と当地の技術が同時に編集され、本書にまとめられたためであると推測できる。さらに、本書の編纂過程と福建省の建築技術変遷について今後研究が期待される。

8. ヒヤリングや史料のまとめと尺法検証の比較

魯般尺法と圧白尺法は建築で使用され、陳輝東は1963年と1983年の2回、福建の工匠に対して調査を行っている。それによれば福建地区では時期は不明であるが、魯般尺法と圧白尺法の使用方法が簡便化されていると述べている。その簡便化の過程は三つの特徴を持つ。

- 1) 簡便化以前は、建築の方位から「尺白」、「寸白」の起点(数字の1に対応する色)が決定され、長さを測ったが、簡便化されたものは方位に関係なく、「尺白」を用いず、長さの寸を圧白(即ち「寸白」)に当てはめるだけである。
- 2) 簡便化以前は、建物の柱高、柱間や桁間寸法には圧白が求められ、梁行総間、桁行総間などにも圧白が求められる。簡便化以後は総間の寸法に関わらず、それぞれの建物の柱高、柱間や桁間寸法を圧白として吉とするのみである。
- 3) 簡便化以前は、魯般尺法は門と架構の造営に用いられたが、簡便化されて門にのみ用いられるようになり、現在の民家架構では用いない。

上記三つの簡便化された技術の特徴(表6の②)は6.3の【吉比率の比較検証】(表6の⑥)の三つの結果と合致する。即ち、本書で記述された寸法は一つの源流とする元代外部から福建省に伝入された尺法を反映しており、陳輝東の尺法調査研究による簡便化後の尺法と合致する。

表6 本書とヒヤリングから見られる福建地方の尺法

出所		門 四	門 白	架構 四	架構 白	架構 総四	架構 総白
『新編 魯般營 造正式』	① 尺法原理	○合	○合	○合	○合	○合	○合
	② 尺法検証	○合	○合	×不合	○合	×不合	×不合
	③ 「古」		○合				
	④ 「今」	○	×不合				
陳のヒ ヤリング	⑤ 簡便化前	○	○	○	○	○	○
	⑥ 簡便化後	○	○	×	○	×	×

凡例：○は使う。×は使わない。○は魯般尺法。白は圧白尺法。「門」は門の寸法。「架構」は架構の寸法。「架構総」は架構の全体寸法。

更に、7.2の【尺法原理と尺法検証合致しない点】により、魯般尺法は元代の福建地方の方法で、圧白尺法は外部から転入した方法と推測できる。5の【尺法原理と他の史料の尺法の比較】によって、本書中の魯般尺法は他の史料に記載される方法より複雑であり、圧白尺法は他の史料の記載より簡単な方法である。以上によると、本書の魯般尺法は元代福建地方で成熟していた複雑な方法で、圧白尺法は外来の簡単な方法であると推測する。なお、福建地方に複雑な圧白尺法(表6の⑤)の存在について詳しいヒヤリング及び文献研究が期待される。

9. 尺法の建築設計に対する影響と意義

上記の研究を更に考察すると、魯般尺法および圧白尺法の建築設

計に対する影響と意義は以下二点と考える。

1) 唐宋時代の遺構の寸法データを分析すると、柱間の寸法値は全て尺の完数となっている。これに対し、両種の尺法の使用は、特に圧白尺法中の「寸白」および「分白」の方法において、門および架構の寸法を「圧白」にするために、「寸」と「分」の単位の数値を生じさせたと考えられる。圧白尺法が建築設計方法に影響を与え「寸」と「分」を生じさせた過程についてはさらなる研究を期待する。

2) 本書では魯般尺法の八字はそれぞれ人生の意味（「昇官」、「孝順」など）を持ち、また住宅内の門が場所（房門、内門など）によって性格の意味に対応し、他の文献より複雑な使い方となる。魯般尺法の複雑化と住宅平面の門の性格の多様化の対応関係については今後の研究を期待する。

10. 結論

『新編魯般營造正式』における「魯般尺法および圧白尺法」の解説による尺法原理は、門および架構において、魯般尺法と圧白尺法を併せて用いるものであり、門を造る時、魯般尺法では「吉」「財」の2文字が最も用いられる。しかし、本書の「門および架構寸法」の検証結果からは、門を造る時のみに魯般尺法と圧白尺法を併せて用いることが確認できた。この検証結果によって、圧白尺法は「寸白」と「分白」の2種の方法を用いる。架構を造る時、架構の柱高、柱間や桁間には圧白尺法の「寸白」のみを用いることも分かった。

上記の尺法原理と寸法検証の比較において、両者が合致しない点、本書に記載される「古」「今」尺法の差異点、および他の史料における尺法との比較の三点から、本書中の魯般尺法は、元代の福建地方の方法であり、圧白尺法は、外部から福建地方へ転入した方法と推測できる。

「門および架構寸法」の検証結果で示した尺法の使用は、陳輝東の福建省調査で明らかになった、簡便化された尺の使い方と同じであることが示せた。なお、設計方法において圧白尺法が柱間の完数制からの変化をもたらした可能性を示し、魯般尺の八字が人生の意味をもち、それが住宅の門の性格に対応していることも示せた。

本研究が基礎となり、尺法の変遷や本書の成立過程などについての今後の研究が進展することを期待する。

謝辞

本論文は修士論文『「新編魯般營造正式」注釈と研究』（参考文献15）を発展させたものである。本研究は2008年10月より、文部科学省の国費奨学金を得て、実施した。本論文の執筆には、指導教官早稲田大学理工学術院中川武教授の指導と、研究室0Bの高野恵子氏、研究室助手の米澤貴紀氏の協力をいただいた、ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

中国語参考文献

- 1) 劉敦楨：『明『魯般營造正式』抄本校讀記』，中国营造匯刊，第6卷第4期，pp. 162-164, 1937. 6
- 2) 劉敦楨：『魯班營造正式』，文物，1962年第2期，pp. 9-11
- 3) 郭湖生：『關於『魯般營造正式』和『魯班經』』，科技史文集（七），pp. 98-105, 1981. 6
- 4) 郭湖生：『魯班經』評述，中國古代建築技術史，科學出版社，pp. 541-544, 1985

- 5) 陳從周：『影印明『魯般營造正式』序』，明魯般營造正式，上海科學技術出版社，1985
  - 6) 新鐫京版工師雕斲正式魯班木經匠家鏡三卷，明萬曆刻本，日本東京内閣文庫に収蔵
  - 7) 新刻京板工師雕斲正式魯班經匠家鏡三卷（郭湖生先生の較勘記入を含む），清刻本，藏于東南大學建築系古籍圖書室
  - 8) 張權實，郭湖生等主編：『中國古代建築技術史』，科學出版社，1985
  - 9) 程建軍：『「圧白」尺法初探』，華中建築，pp. 47-59, 1988年2期
  - 10) 程建軍，孔尚朴：『風水與建築』，江西科學技術出版社，2005年1月第2版
  - 11) 李乾朗：『台灣古建築圖解』，台北，台灣館編輯制作，2003. 7
  - 12) 陳耀東：『魯班經匠家鏡研究』，中國建築工業出版社，2010. 4
  - 13) 李哲揚：『潮汕傳統建築大木構架研究』，華南理工大學博士論文，2005. 4
  - 14) 張玉瑜：『實踐中的營造智慧——福建傳統大工匠師技藝搶救性研究』，東南大學博士論文，2004. 12
  - 15) 朱寧寧：『新編魯般營造正式』注釈と研究，東南大學修士論文，2004. 12
- #### 日本語参考文献
- 16) 浅川滋男：『中国の民家・住居史研究』，建築史学，第二十号，pp. 102-126, 1993. 3
  - 17) 田中淡：『中国の伝統的木造建築』，建築雑誌，vol. 98, No. 1214, pp. 32-35, 1983. 1
  - 18) 窪徳忠：『唐尺と魯般尺』，宗教学論集（19），pp. 69-80, 1996. 7
  - 19) 安田徹也：『魯般尺に関する文献調査』，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2, pp. 105-106, 2004. 8
  - 20) 清末隆廣，中川武，白井裕泰，中沢信一郎，坂本忠規，中村泰一，ものさしについて（III）：『ヴェトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究（その70）（建築歴史・意匠）研究報告集 II，建築計画・都市計画・農村計画・建築経済・建築歴史・意匠（73）』，pp. 529-532, 2003. 2. 28
  - 21) 朱寧寧：『新編魯般營造正式』の注釈と研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2, pp. 453-454, 2010. 7

注

- 注1) 参考文献3) p. 101 郭湖生（1931-2008、中国の建築史家、東南大学教授）の研究により、『新編魯般營造正式』の中の「某路某県某郷某里某社」は元代の行政区名であることが分かる。これによって、『新編魯般營造正式』の製本年代は元代と推測できる。
- 注2) 郭湖生は1980年代に東南大学の建築史研究室に収蔵されている清の版本の『魯班經』（南工本『魯班經』と呼ばれている）中に、校勘記入をした。この本と郭湖生の記入は現在未刊行である。
- 注3) 参考文献15) より、「寿額」、「槽門」、「偃桷」、「直板垂魚」、「斗叉童」、「斗磗」、「次棟」などは福建地方で使われた建築部材の名称であり、または、福建地方に特有の部材である。
- 注4) 順に、「營造儀礼」、「水平道具」、「尺法凶吉」、「構築寸法」、「相宅」、「造門」、「細部」、「畜園」である。
- 注5) 例えば『三台萬用正宗』、『萬用正宗不求人』、『五車拔錦』など。
- 注6) 参考文献12) 陳耀東が『魯班經』を中心として福建地方の尺法に関する研究を行った。
- 注7) 参考文献9)、10) 程建軍が中国風水学における建築の尺法に関する研究を行った。
- 注8) 参考文献13) 李哲揚が中国広東省潮汕地方の伝統建築の架構における圧白尺法と魯般尺法の使用に関する研究を行った。
- 注9) 参考文献19)、20)
- 注10) 参考文献9) p. 47 によって、北斗七星とそれに付属する二つの星を加え、北斗九星とする。堪輿家はこれを根柢とし、堪輿九星、即ち貪狼、巨門、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍、左輔、右弼を發展させた。
- 注11) [晋]郭璞『葬書』（清文淵閣四庫全書本）では九星白法に関する記載は以下である。「淺深世俗多用九星白法以定尺寸、謬也。」
- [宋]蔡元定『發微論』（清文淵閣四庫全書本）では九星白法に関する記載は以下である。「淺深篇：經曰地吉葬凶、與棄屍同。正此義也、世俗裝卦例、論九星白法以定尺寸者大謬也。」
- 注12) 参考文献10) p. 146
- 注13) 参考文献14) p. 133
- 注14) 参考文献18) p. 74 より、沖縄に残る「唐尺」の裏面に書いている魯般尺法と圧白尺法を併せては使う方法は以下である。「此真正魯般尺。乃公輪子所製。内包羅造化。弁別吉凶。凡賢造安墳。以及神合龍（龍は字彙の誤記）用家司什物。船只散倉。凡天下有尺寸之物。皆經此尺。其間度用取一尺四寸四分。用財義官本病離劫害八字。財義官本可用。病離劫害不可用。」

凡量物，開二尺一寸為一白在尺內為義字上。二尺八寸為八白。合尺內吉上。用四尺二寸一分合四綠。一白在本上。用四尺三寸八分合財字。能依此法。萬無一失。以右手用尺。將財德為首。依字脚向外。從便取法。」

注15)『新編魯般營造正式』の内容は具体的な項目としては以下の45である：(前脱三頁)1 請設三界地主魯般仙師文、2 詩曰、3 定盤真尺、4 詩曰、5 斷水平法、6 魯般真尺、7 魯般尺詩八首、8 本門詩曰、9 曲尺詩、10 曲尺之図、11 推起造向首合白吉星、12 凡伐木克損日辰興工、13 推匠人起工格式、14 推造宅舍吉凶論、15 三架屋後連一架、16 詩曰、17 画起屋樣、18 五架房子格、19 詩曰、20 造屋間數吉凶例、21 歌曰、22 正七架三間格、23 詩、24 正九架五間堂屋格、25 詩曰、26 秋遷架、27 小門式、28 樓焦亭、29 詩、30 詩曰、31 詩曰、32 搥仙賢云、33 郭璞相宅詩三首、34 詩、35 又歌曰、36 造門法、37 起庁堂門例、38 詩曰、39 諸樣垂魚正式、40 駝峯正格、41 五架屋諸式図、42 五架後拖兩架、43 正七架格式、44 占牛神出入、45 五音造羊棧格式。

注16)項目6、9、10、11、18、19の原文と注釈は以下である。

【項目6】「魯般真尺」魯般尺乃有曲尺一尺四寸四分，其尺間有八寸，一寸準曲尺一寸八分。內有財、病、離、義、官、劫、害、吉也。凡人造門，用依尺法也。【注釈】「魯般真尺」魯般尺の一尺は曲尺の一尺四寸四分に当たり、その中で八寸に分かれ、一寸は曲尺の一寸八分に当たる。八寸の中には、財、病、離、義、官、劫、害、吉という八字がある。門を造る場合には、この尺を使う。

【項目8】「本門詩曰」本字開門大吉昌，尺頭尺尾正相當。量來尺尾須當吉，此到頭來財上量。【注釈】「本門詩曰」門の寸法は「本」であれば大吉である。尺頭から尺尾にも合う。「本」が尺頭であれば尺尾は「吉」である。「本」が尺尾であれば尺頭は「財」である。

【項目9】「曲尺詩(圖在後)」一白難如六白良，若然八白亦為昌。不將般尺來相湊，吉少凶多必主殃。【注釈】「曲尺詩(圖在後)」一白は六白より良いということは難しい。しかし、八白もよい。魯般尺と一緒に使わないと、魯般尺法における「吉」の寸法は少なく、て、「凶」の寸法は多いことは知らない場合は、災害がおこる。

【項目10】「曲尺之図」曲尺者有十寸，一寸乃十分。凡遇起造、經營、開門，高低長短度量皆在此上。【注釈】「曲尺之図」曲尺の一尺は十寸である。一寸は十分である。建物を造る時、設計する時、門を造る時、高低と長短は皆曲尺で測る。

【項目11】「推起造向首合白吉星」其白外，但則九紫為小吉。人要合魯般尺與曲尺，上下相全為好。【注釈】「推起造向首合白吉星」「白」以外、「九」数の色は紫で、「小吉」である。曲尺と魯般尺を合わせて使う必要がある。

【項目18】「五架房子格」此皆壓白即言也。【注釈】「五架房子格」これらの寸法値は「圧白」ということである。

【項目19】「詩曰」按白量材實利宜。【注釈】「詩曰」圧白尺法で部材寸法を設計すれば良い。

注17)【項目7】の「魯般尺詩八首」の原文は以下である。A-Rの八字と八門の対応関係も加えた。

「財詩曰」財字臨門仔細，外門(A)招得外財良。若在中門(B)常自有，積財須用大門(C)當。中房(D)若合安於上，銀帛千箱與萬箱。木匠若能明此理，家中福祿自榮昌。

「病字」病字臨門招疫疾，外門(E)神鬼入中庭。若在中門(F)逢此字，災須輕可免危聲。更被外門相對對，一年兩度送屍靈。於中若要無凶禍，廁上(G)無疑是好親。

「離字」離字臨門事不祥，仔細排來在甚方。若在外門(H)并中戸(I)，子南父北自分張。房門(J)必主生離別，夫婦恩情兩匆忙。朝日主家常作鬧，慚惶無地禍誰當。

「義字」義字臨門孝順生，一字中戸(K)最為真。若在都門招三婦，廊門(L)淫婦變之聲。於中合字雖為吉，也有興災害及人。若是十分無災害，只有厨門(M)實可親。

「官字」官字臨門自要詳，莫教安在大門(N)場。須房公事親州唐，富貴中庭房自昌。若要房門(O)生貴子，其家必定出官郎。富貴人家有相壓，庶人之屋實難量。

「劫字」劫字臨門不足誇，家中日事如麻。更有害門相照看，凶來疊疊禍無差。兒孫行劫身遭苦，作事因循害却家。四惡四凶星不吉，偷人物件害其它。

「害」害字安門用細尋，外門(P)多被外人臨。若在内門(Q)多興禍，家財必被賊來侵。

「吉字」吉字臨門最是良，中門(R)内外一齊強。子孫夫婦皆榮貴，年年月

月旺蠶桑。如有財門相照者，家道興崇最吉昌。使有凶神在旁位，也無災害亦風光。

注18)「宋」『事林廣記』の中では「尺法」に関する記載は以下である。

「魯般尺法：淮南子曰、魯般即公輸般、楚人也。乃天下之巧士、能作雲梯之械。其尺也、以官尺一尺二寸為準、均分八寸、其文曰財、曰病、曰離、曰義、曰官、曰劫、曰害、曰吉；乃北斗中七星與輔星主之。用尺之法、從財字量起、雖一丈十丈皆不論、但於丈尺之內量取吉寸用之、遇吉星則吉遇凶星則凶。亘古及今、公私造作、大小方直、皆本乎是。作門尤宜子細。又有以官尺一尺一寸而分作長短寸者、但改吉字作本字。其余并同。」

「飛白尺法：陰陽書云、一白、二黑、三碧、四綠、五黃、六白、七赤、八白、九紫、皆星之名。惟有白星最吉。用之法、不論丈尺、但以寸為準、一寸、六寸、八寸乃吉。縱合魯般尺、更須巧算、參之以白、乃為大吉。俗呼之圧白。其尺只用十寸一尺。」

注19)〔元〕佚名『居家必用事類全集』居家必用事類全集丁集(明刻本)の中では「尺法」に関する記載は以下がある。

「開門尺法：古言、寧去人家造百墳、莫去人家造一門。門最利害。一家禍福率由之、周尺分節、一財、二病、三離、四義、五官、六劫、七害、八吉。財與吉為上、官義次之、餘無取。財吉公私内外通用。官可用之官房、中戸出文章貴子。庶人用之起官事、凶。義可用之中房、出人孝順。若在外門、生兩姓同居、若人家内外大小門戸、以財、吉、義三者兼用之。主世代昌隆。特「義」不可用之外門耳。」

「魯般尺法：「淮南子曰」魯般即公輸般、楚人也。乃天下之巧士、能作雲梯之械。其尺也、以官尺一尺二寸為準、均分八寸、其文曰財、曰病、曰離、曰義、曰官、曰劫、曰害、曰吉；乃北斗中七星與輔星主之。用尺之法、從財字量起、雖一丈十丈皆不論、但於丈尺之內量取吉寸用之、遇吉星則吉遇凶星則凶。亘古及今、公私造作、大小方直、皆本乎是。作門尤宜仔細。」

注20)〔明〕佚名『宅寶經』(明萬曆吳勉學刻本)の中で、「尺法」に関する記載は以下である。「九天玄女裝門尺法、悉憑匠人門尺所傳、應驗可知。」という条目がある。

注21)〔明〕午榮『魯班經』卷一(清乾隆刻本)の中で、「尺法」に関する記載は以下である。「按九天玄女裝門路(格)以玄女尺算之、每尺止得九寸有零、却分財病離義官劫害本八位、其尺寸長短不齊。惟本門與財門相接最吉。義門惟寺觀學舍義聚之所可裝。官門惟官府可裝。其餘民俗只粧本門與財門。相接最吉。大抵尺法各隨匠人所傳術者、當依魯般經尺度為法。」

注22)〔清〕李斗『揚州畫舫錄』卷一(清乾隆六十年自然齋刻本)の中では、「尺法」に関する記載は以下である。「古尺法為十五種：曰周尺、曰晉田父玉尺、曰梁表尺、曰漢官尺、曰魏尺、曰晉後尺、曰後魏前尺、曰中尺、曰後尺、曰東魏後尺、曰蔡邕銅簡尺、曰宋氏尺、曰隋水尺、曰雜尺、曰梁俗間尺、而必以周尺為之本。」

注23)『陽宅十書』中で、「尺法」に関する記載は以下である。「用門尺法：海內相伝門尺數種、屢經驗試、唯此尺為真。長短協度、凶吉无差。蓋昔公輸子班、造極木作之聖、研窮造化之微、故創是尺。后人名為魯班尺。非止量門可用、一切床房器物、俱当用此、一寸一分、灼有關係者。」

注24)〔元〕佚名『新編魯般營造正式』の中では「凡人造門，用依尺法也」という条目がある。

注25)注18)と同じ

注26)注19)と同じ

注27)注18)と同じ

注28)〔明〕吳國仕『造命宗鏡集』卷十一「雜用類」(明崇禎三年吳氏搜玄齋刻本)中で、「魯般尺法」に関する記載は以下である。「魯班尺一寸管一字財、離、病、義、官、劫、害、本内財、義、官、本四字吉餘凶。凡造門法、惟官衙門宜用官、義、本三字吉。寺觀門宜義字吉。士庶門宜用財、義、本三字吉。宦門宜官字大吉、餘忌不宜。」

注29)〔清〕馮桂芬『(同治)蘇州府志』卷十二(清光緒九年刊本)中で、「魯般尺法」に関する記載は以下である。「情伏查部頒新弓係用營造尺五尺、蘇省舊弓係用魯班尺六尺。以尺數論舊弓較多一尺、實則魯班一尺、合營造尺僅八寸八分、以六尺計之合營造尺僅五尺二寸八分。並不足六尺之數。」

注30)〔清〕胡彥昇『樂律表微』卷一(清文淵閣四庫全書本)中で、「魯般尺法」に関する記載は以下である。「朱氏圖載營造尺即木匠曲尺、今木匠曲尺一尺得營造尺九寸。嘗詢匠氏曲尺異同、答云此名魯班尺、自古至今無二尺。」

注31)〔清〕李斗『揚州畫舫錄』卷十七(清乾隆六十年自然齋刻本)中で、「魯般尺法」に関する記載は以下である。「門尺有曲尺、八字尺二法。曲尺長一尺四寸四分(為)八字尺、長八寸、每寸準曲尺一寸八分、皆謂門尺。長亦維均八字：財、病、離、義、官、劫、害、本也。」

注32)ここの「八字尺」は魯般尺を指す。

注33) [清]張宗法『三農紀』卷九(清刻本)中で、「魯般尺法」に関する記載は以下である。「木經云、上戸門六尺六寸、又云高五尺七寸、濶四尺八寸、總要合魯班尺式財、本二字。不可犯病、離、義、官、刼、害六字、可能获吉。」

注34) 吉凶の比は4吉4凶であるが、さらに、大吉、小吉、小凶、大凶に分かれ、その比率は1:1:1:1である。

注35) 注18)と同じ

注36) [明]吳國仕『造命宗鏡集』卷十一「雜用類」(明崇禎三年吳氏搜玄齋刻本)中で、「圧白尺法」に関する記載は以下である。「惟子房尺曲尺以九寸。分九部一寸爲一白、六寸六白、八寸八白、九寸九紫、皆吉。」

注37) [明]午榮『魯班經』卷二(清乾隆刻本)中で、「圧白尺法」に関する記載は以下である。「造欄用木尺寸法度。用尋向陽木一根作棟柱、用近在人屋在畔牛性作寒、使牛温暖、其柱長短尺寸用壓白、不可犯在黒上。」

注38) [清]張宗法『三農紀』卷九(清刻本)中で、「圧白尺法」に関する記載は以下である。「牛欄:造欄須選向陽青萃木一根、作棟柱、短長尺寸宜壓白、不可犯黒。間架宜雙勿單、高底尺寸俱宜合六白。然八亦属白、又云八敗、故忌。」

注39) [清]李斗『揚州畫舫録』卷十七(清乾隆六十年自然齋刻本)中で、「圧白尺法」に関する記載は以下である。「曲尺十分爲寸、一白、二黒、三碧、四緑、五黄、六白、七赤、八白、九紫、一白也。」

注40) [清]宮夢仁『讀書紀數略』卷一天部(清文淵閣四庫全書本)中で、「圧白法」に関する記載は以下である。「九宮洛書:一白正北、二黒西南、三碧正東、四緑東南、五黄中宮、六白西北、七赤正西、八白東北、九紫正南。」

注41) [明]吳國仕『造命宗鏡集』卷六(明崇禎三年吳氏搜玄齋刻本)中で、「圧白法」に関する記載は以下である。「三元年白例(略)、三元月白例(略)、三元日白例(略)、三元時白例(略)年白不如月白、日白有力(方)大吉、時白則不如也。(略)」

注42) [清]李斗『揚州畫舫録』卷十七(清乾隆六十年自然齋刻本)中で、「圧白尺法」に関する記載は以下である。「又古裝門路用九天元女尺、其長九寸有奇匠者繩墨三白九紫、工作大用。日時尺寸上合天星、是爲圧白之法。」

注43) 「魯般真尺」の一部の原文と注釈は以下である。

【項目6】假如單扇門，小者開二尺一寸，壓一白，般尺在義上。單扇門，開二尺八寸，在八白，般尺合吉上。雙扇門者，用四尺三寸一分，合三緑一白，則爲本門，在吉上。如財門者，用四尺三寸八分，合財門，吉。大雙扇門，用廣五尺六寸六分，合兩白，又在吉上。今時匠人則開門，濶四尺二寸，乃爲二黒，般尺又在吉上。及五尺六寸者，則吉上。二分加六分正在吉中，爲佳也。皆用依法，百無一失，則爲良匠也。【注釈】例えば、單扉の門を造る場合、規模が小さいときは、扉の幅は二尺一寸にする。すると曲尺は「一白」で、魯般尺は「義」である。または、二尺八寸にする場合、曲尺は「八白」で、魯般尺は「吉」である。双扉の門を造る場合、扉の幅は四尺三寸一分にする。すると曲尺は「一白」で、魯般尺は「本」で、両方とも吉の意味になる。「財門」の場合は、幅を四尺三寸八分にして、魯般尺は「財」であり、吉である。大双扉の門を造る場合には、幅は五尺六寸六分にする。曲尺は二つの「六白」、魯般尺は「吉」になる。今の工匠が門を造る時、幅は四尺二寸にする。曲尺では「二黒」、魯般尺では「吉」である。五尺六寸の場合、曲尺は「六白」、魯般尺は「吉」である。もし、二分上に六分を加えて、八分にすれば、曲尺は「八白」で「吉」になって良い。それは失敗がない方法であるから、この方法を使えば良匠である。

注44) 項目15, 18, 22, 24の原文と注釈は以下である。

【項目15】「三架屋後連一架」造此小屋者，切不可高大。几歩柱，只可高一丈零一寸。棟柱高一丈二尺一寸。段深五尺六寸，間闊一丈一尺一寸，次間一丈零一寸，此法則相稱也。【注釈】「三架屋後連一架」この小屋を造る場合には、絶対に規模を大きくしてはならない。歩柱の高さは高くても一丈一寸までとする。棟柱の高さは一丈二尺一寸とする。架深は五尺六寸、中央間は一丈一尺一寸、脇間は一丈一寸にする。この法則は、この形式(三架屋後連一架)と互いにつり合うのである。

【項目18】「五架房子格」正五架三間拖後一柱。歩用一丈零八寸，仲高一丈二尺八寸，棟高一丈五尺一寸。每段四尺六寸。中間一丈三尺六寸，次間一丈二尺一寸。地基闊狹則在人加減，此皆壓白即言也。【注釈】「五架屋子格」正五架三間拖後一柱という形式は、正面3間、側面4間を背面に1間加えて、側面に5間となる。歩柱の高さは一丈八寸、仲柱の高さは一丈二尺八寸、棟柱の高さは一丈五尺一寸にする。架深は四尺六寸、中央間は一丈三尺六寸、脇間は一丈二尺一寸にする。屋の規模は人によって加減してもよい。これ、すなわち皆圧白というのである。

【項目22】「正七架三間格」七架堂屋，大几架造，合用前後，柱高一丈二尺六

寸。棟高二丈零六寸。中間用闊一丈四尺三寸，次間一丈三尺六寸。段四尺八寸，地基闊側、高低、深淺，隨人意加減則爲之。【注釈】「正七架三間格」この七架堂屋の架構を造る場合には、一般的に、前(室)と後(室)を合わせて用いる。柱高は一丈二尺六寸で、棟柱は二丈六寸である。中央間は一丈四尺三寸、脇間は一丈三尺六寸である。架深は四尺八寸である。平面の規模、(柱の)高さ、(奥行の)深さは、それぞれの人によって、加減し、この架構を造るのである。

【項目24】「正九架五間堂屋格」凡造此屋，歩柱用高一丈三尺六寸。棟柱，或地基廣(闊益一丈四尺八寸；段淺者四尺三寸)，或十分深，高二丈二尺，棟克妙。【注釈】「正九架五間堂屋格」この構造(正九架五間堂屋格)を造る場合には、歩柱の高さは一丈三尺六寸である。平面の規模が広い(中央間が間口一丈四尺八寸、架深は四尺三寸)、または、十分に奥桁が深い場合、棟柱は高さ二丈二尺にする。そうすれば、棟柱の高さは平面規模とつりあって、みごとである。

注45) それらの専用名詞の日本語注釈は以下である。

「歩柱」は正面と背面の側柱である。「棟柱」は棟通りの柱である。「仲柱」は「歩柱」と「棟柱」間の柱である。「架深」は梁行の柱間のことである。「心間」は桁行柱間のうち、中央(最大)の柱間である。「次間」は脇間の柱間である。

注46) それらの専用名詞の日本語注釈は以下である。

「総架深」は桁行総柱間である。「総面闊」は梁桁総柱間である。

注47) 「総架深」、「総面闊」の計算方法は以下である。

三架後連一架:「総面闊」=「心間」+「次間」 $\times 2 = 111 + 101 \times 2 = 313$ 寸

三架後連一架:「総架深」=「架深」 $\times 3 = 56 \times 3 = 168$ 寸

五架拖後一柱:「総面闊」=「心間」+「次間」 $\times 2 = 136 + 121 \times 2 = 378$ 寸

五架拖後一柱:「総架深」=「架深」 $\times 5 = 46 \times 5 = 230$ 寸

正七架:「総面闊」=「心間」+「次間」 $\times 2 = 143 + 136 \times 2 = 415$ 寸

正七架:「総架深」=「架深」 $\times 6 = 48 \times 6 = 288$ 寸

正九架:「総架深」=「架深」 $\times 8 = 43 \times 8 = 344$ 寸

注48) 参考文献10) p.147より、「十」は「白」(吉)である。1から10までの数字の内に、「圧白」に当てはめる数字は1、6、8、10の四つであり、吉比率は40%である。従って、任意数字は圧白尺法における吉になる可能性は40%である。

注49) 魯般尺の一尺の八字の内に、4つは吉、4つは凶であり、吉比率は50%である。従って、任意数字は魯般尺における吉になる可能性は50%である。

注50) 図6は表5に出てくる寸法値の吉凶判断を説明している。一番左の上を「0」として、一番右下が「441」となるが、便宜上、魯般尺の文字のため(例えば官と刼の間)、これを4本に分けて載せている。例えば、101寸の場合、圧白尺法の目盛を見ると、「一白」になっており、圧白している。魯般尺の目盛を見ると「財」になっており、従って、101寸は、どちらの尺法でも良い数字ということになる。

注51) 中国南部においては、貫構造となるため、梁、貫などの部材長は、柱心でとる。又、工匠は部材を計る時に、仕口も含めた全長でとる。

注52) 注43)と同じ

注53) 参考文献15)、21)によって、『新編魯般營造正式』の編纂の祖本は本書に書名が記載された『魯般經』と『營造正式』と推測した。その二冊の本は現存していないが、尺法内容との関係について、圧白尺法と魯般尺法を併せて架構に用いる方法は『魯般經』の内容から、圧白尺法のみ架構に用いる方法は『營造正式』の内容からであると推測したが、今後更なる詳しい研究が期待される。

注54) 『新編魯般營造法式』における「古」と「今」の技術の差異に関する記載は以下である。

【項目8】「本門詩曰」福祿乃爲門上致，子孫必出好兒郎。時師依此仙賢造，千倉萬廩有餘糧。【項目13】「推匠人起工格式」今有晚学木匠，則先將棟柱用工，則不按魯般之法。【項目25】「詩曰」謹按仙師真尺寸，管教富貴足莊田。時人若不依仙法，致使人家兩不然。【項目26】「秋迁架」秋迁架，今人偷棟柱，爲之吉，以如此造。其中創閣，要坐起处，可則依此格尽好。【項目30】「詩曰」此物分明端正奇，暗中爲禍少人知。只因匠者多叢素，也是時師不細詳。使得家門長退落，緣他屋主太隈衰。從今若要兒孫好，除是從頭改過爲。【項目39】「諸樣垂魚正式」今人又喚作繁針，如用此，又用做遮風及偃桷者，方可使之。今之匠人又有不使垂魚者，只使直板，作如意頭垂下者，亦好。如不使，則又不妨。如不做如意只作雕云樣者，亦好。皆在主人之所好也。【項目40】「駱掌正格」或今之人多只愛使斗，立叉童，乃爲時格也。【項目42】「五架后拖兩架」五架屋後添兩架，此正按古格。今時人喚做前淺后深之說，乃住坐笑隱也。如造正五架者，必是其基地如此，別有実格式可驗之也。

(2011年11月10日原稿受理、2012年4月18日採用決定)